（別紙様式）【特色あるフロンティアスクールの取り組み事例】

都道府県番号	２８
都道府県名	兵庫県

（①□　② ☑　③□）

Ⅰ．学校名及び規模

姫路市立城陽小学校										
	１年	２年	３年	４年	５年	６年	特殊学級	計	教員数	
児童数	９５	１１６	９７	１００	１０５	１０４	１	６１８	２６	
学級数	３	３	３	３	３	３	１	１９		

Ⅱ．実践研究の概要

・主題（テーマ）

教科担任制と協力的な学習指導を推進し、子どもをキラリと輝かそう

平成１４年度テーマ　「なにごとにも集中して取り組める児童の育成」

・テーマ設定の趣旨

２１世紀を迎えた現在、我が国は様々な面で激しい変化に直面しており、これからの社会を担う児童が主体的創造的に変化に対応していくため、児童一人ひとりに「生きる力」をつけさせることが重要である。

本校でも、「高学年における教科担任制」と「少人数指導や同室複数指導等の方法による協力的な学習指導」等の個に応じたきめ細かな指導の充実に努めることにより基礎・基本を確実に定着し、それを基に、自ら学び自ら考える力など、２１世紀に通用する「生きる力」を育成しようと考えた。

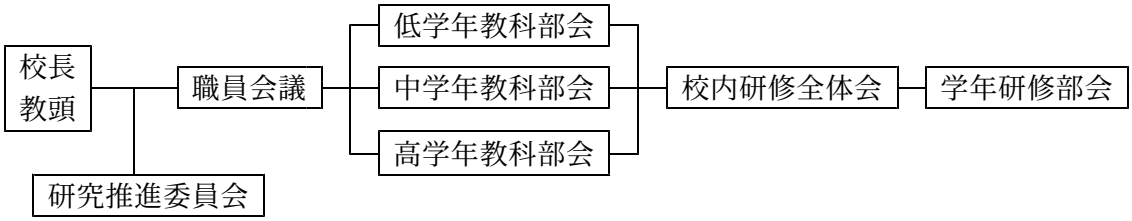
しかし、形態や方法がいくら整っても、それだけでは児童に「生きる力」をつけることにはならない。授業の中で、児童が互いに自分らしさを十分に発揮し、生き生きと学習し合う中でこそ、それは育つものだと考えている。

そこで、児童の目がキラリと輝き、考えがキラリと輝き、一人ひとりの人間がキラリと輝くような授業を学校全体の協力的な指導体制の中で創り出していきたいと考え本テーマを設定した。

Ⅲ．実践研究の内容について

（ｉ）研究体制の工夫

研究推進委員会で話し合った内容の共通理解は、まず大まかな事項について職員会議で報告し、隣接学年部会で詳細について討議する。それを校内研修全体会で再度検討した後、学年研修部会で具体化していくようにしている。研究推進委員会に道徳担当や生徒指導担当を入れているのは、この研究が単に学力を向上させるだけのものではなく、一人ひとりの児童の人間教育をしていこうという本校の姿勢の表れである。

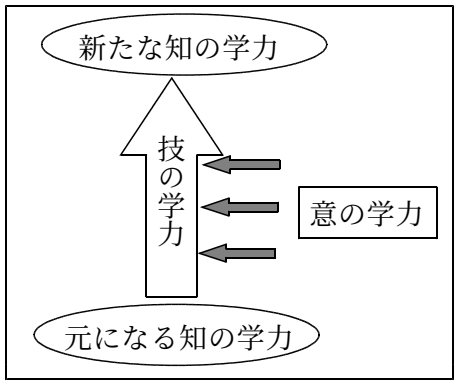


＊研推委メンバー　校長・教頭・教務・研修担当・道徳担当・生徒指導担当・学習システム担当・学年１名（兼任可）

（ⅱ）実践研究の内容

① 本校の考える「学力」とは

本校では、学力を「知の学力」「技の学力」「意の学力」の３つに分類して考えている。学習する以前に持っていた「元になる知の学力（基礎的な学力）」を土台にして、「技の学力（スキル・思考力等）」を活用しながら「新たな知の学力（新たな基礎的な学力）」を獲得していく。しかし、この学習の流れを成立させ、継続させるのは、「意の学力（意欲・集中力・耐える力等）」であり、この３つの学力がそれぞれ連携して向上していくことを、「確かな学力の向上」と考えている。



② 具体的な実践例（高学年における教科担任制）

ア 教科担任制に取り組む４つの理由

・中学校への円滑な接続のため
・教師の専門性を生かした指導方法の工夫による確かな学力向上のため
・開かれた学級づくり（内に開かれた学校づくり）のため
・「教科を担任して指導する制度」でなく、「その教科で子どもを担任する制度」であるという意識を持ち、多くの教師が関わって一人ひとりの子どもの人間教育をより一層推進していこうとするため

イ 指導体制の工夫

６年	国語、言語、書写	社会	算数	理科	音楽	図工	家庭	体育
１組	A　C　F	G	GA	A	D	C	E	A
２組	B　C　F	G	GB	A	D	C	E	B
３組	C　C　F	G	GC	A	D	C	E	C

１組担任Ａ　２組担任Ｂ　３組担任Ｃ　担任外Ｄ　担任外Ｅ　教頭Ｆ
新学習システム加配教員Ｇ　＊２組担任Ｂは９時間１年算数ＴＴを行う。

５年	国語、言語、書写	社会	算数	理科	音楽	図工	家庭	体育
１組	O　Q　F	O	RO	P	D	Q	E	OG
２組	P　Q　F	O	RP	P	D	Q	E	PG
３組	Q　Q　F	O	RQ	P	D	Q	E	QG

１組担任Ｏ　２組担任Ｐ　３組担任Ｑ　担任外Ｄ　担任外Ｅ　教頭Ｆ
人権支援教員Ｒ　＊人権支援教員Ｒは９時間２年算数ＴＴを行う。

ウ 教科担任制を実践して

教科担任制の成果を学習指導の面から見ると、①教師の得意教科を生かした指導ができる　②教材研究が深まる　③学級担任同士がいい意味でのライバル意識を持つ　④どのクラスでも教科の評価規準が統一される、といった利点が挙げられる。児童理解の面からは、担任外の児童理解の深まりはもちろんのこと、担任している児童についても、自分の見えなかった面が見えるようになるという利点がある。

さらに、教師集団の面からも、連帯感や責任感、安心感が一層強まる利点が挙げ

られる。
　しかし、このような教科担任制のよさは、学年団としての、また学校全体としての協力体制が整っていなければでてこない。児童や学級の雰囲気のわずかな変化を察知し、学年団として学校として対応していくことにこそ、小学校での教科担任制のよさがあるといえる。
　本校は、「スマイルandスクラム」を合い言葉に教師が一丸となって教育活動に邁進し、教師も子どもも「私の学校」意識を持って、これからも教科担任制を推進していこうと考えている。

エ　少人数指導や同室複数指導等の方法による協力的な学習指導

(ｱ)　少人数指導等に取り組む理由

・　授業の質を高め、意欲を持つ子どもを育てるため
・　基礎・基本の確実な定着を図るため
・　複数の教師による多面的な児童理解と個性を生かす教育の充実のため

(ｲ)　指導体制の工夫

・　すべての学年で、算数について協力的な学習指導を行う。
・　学習集団が互いに無関係な状態にならないように、常に学年全体の話し合いを持ち、指導方法や児童理解を深め共通理解していく。
・　単元や指導内容に応じて、学級内TTや(学級数＋1)少人数指導、学級ハーフサイズ少人数指導等の中から適切な指導形態を選択し、柔軟に実践する。

③　学力を把握するための学校の取組

・定期的な学力調査の実施（年１回）
　個人の見える学力の蓄積、比較、分析をするとともに、学年の学力の変化を比較、分析する。
・観察による評価の実施（授業中随時）
　個人の見えない学力を中心に、日常の学習場面で、児童の表情や行動、発言等を観察して、その様子から児童の学力を把握する。評価規準は、教師の主観に頼ることが多いので、できるだけ客観性を持たせるために、評価規準用語例を作成し、それを参考に評価する。

（iii）成果と課題

①　成果

　算数科を中心にした少人数指導や同室複数指導等の方法による協力的な学習指導や、高学年における教科担任制について、意識調査を実施したところ、次のような結果が出た。
　まず、協力的な学習指導についての意識調査を第３学年に実施したところ、全員が協力的な学習指導の形態を支持した。また、第５学年への教科担任制の調査では、９８％が来年度も教科担任制で学習したいと回答した。その理由として、児童はいずれの調査でも、説明がよくわかり、授業に集中できるからと答えている。
　児童の学力面では、特に情意面での向上がみられる。この１年間、学力向上フロンティアスクールとして実践してきたが、キラリとした目で活動している児童が多く見られる様になってきた。集中して繰り返し学習に取り組んでいる様子は、これまでの取り組みが決して間違っていないことを表している。

②　課題

これまで、学力を「知の学力」「技の学力」「意の学力」の３つに分類し、児童に確かな学力をつけようと実践してきた。「知の学力」「技の学力」は、学力検査等でも確実に向上している結果が出ている。しかし、すべてを学力調査で判断することは、なかなか困難である。「意の学力」の向上については、教師の観察や児童へのアンケートが中心にならざるを得ないが、こうした目に見えない学力の向上を把握するためのより具体的な評価規準を今後も研究していく必要がある。

（iv）成果の普及方策

・学力向上フロンティア事業（新学習システム）研修会
　平成１４年１２月３日（火）姫路職員福利センターにて開催
・中間発表会　平成１５年度　期日未定　　場所　姫路市立城陽小学校
　対象　兵庫県中播磨地区フロンティア事業等加配教員
・研究発表会　平成１６年度　期日未定　　場所　姫路市立城陽小学校
　対象　兵庫県中播磨地区教職員
・ＨＰ作成の予定　未定